

奈良競馬の蹄跡を辿って～記録保存プロジェクト:奈良競馬場と地域～

概要

本稿は私の住む奈良県の馬事文化の歴史について、奈良競馬場の存在を記録するという視点で論じた。馬の歴史における競馬は、発祥は近代のものでありながら地域と馬を繋ぎ、共に歩む興行として身近である。また、競馬開催は太平洋戦争など世界史や日本史との関わりも深く、その点においても奈良競馬場を記録し保存することは意味のあることであると考える。奈良競馬場での競馬開催、そしてそれに携わる人々や走っていた競走馬はどんなものだったかを当時の新聞や書籍、写真などからわかりやすいよう記録し、考察した。

1. 研究の背景

私は中央競馬から競馬という競技を知り、さまざまな競走やサラブレッドの血統を見るうちに競馬の歴史について興味を持った。そして調べたところ日本には江戸時代末期から現代までに多くの競馬場が建設され、そのうちのほとんどはすでに廃止されている（1）ことがわかった。しかしその競馬開催の跡が残る場所は少なくないことも、同時に知った。奈良競馬場もそのうちのひとつで、昭和初期から戦後にかけて存在した（2）。現在では奈良県内に競馬場や競馬に関する施設は存在しないが、当時は競馬場があったことに驚きもっと詳細を知りたいという思いで調査を開始した。

本稿では、私の住む奈良県の馬事文化の歴史について、奈良競馬場の存在を記録するという視点で論じた。また、地域の人との関わりの大きい部分として、廃止後の土地の利活用にも焦点を当てている。

2. 調査

2.1. 記録することの意義

奈良競馬場を記録・保存することには、奈良県内で身近であった馬と人との関わりを後世に伝え、馬がどんな用途で用いられたかを理解するという意義がある。特に第二次世界大戦中の競馬場では、鍛錬馬競走が行われ軍馬の育成や国民の士気の向上を狙っていたことから、設置から昭和20年代にかけて激動の時代を生きた奈良競馬場の歴史を整理し記録することは歴史に触れるという観点でも大いに意味のあるものになると考える。

2.2. 調査の手法

では、奈良競馬についての調査に移る。本稿では、主に書籍を用い奈良競馬場史及び全国競馬史の調査を行った。また、奈良競馬場跡地の様子やその痕跡の概要については、フィールドワークによってその様子を捉えた。

奈良競馬場については『地方競馬史第1巻』(地方競馬全国協会、1974年)に概要が述べられている(3)。しかし、その情報は古く、奈良競馬場が設置されていた21年のうち最初の9年を占める「尼ヶ辻競馬」時代(後述)までの情報の記載に留まる。また、詳細な説明としては馬券の販売やそのレース形態などが不十分である。そこで、不足する情報を当時の奈良新聞、大和タイムスや奈良日日新聞、毎日新聞の紀和・大和面に記された記録や、『古都の暮らし・人-昭和20年から昭和30年代-』(入江泰吉記念奈良市写真美術館、2005年)内の写真などから加え、文章及び図表にまとめた。

フィールドワークでは、今まで奈良競馬場跡地がどのように利用されているか調べるとともに、競馬場時代の面影を残す部分について写真に撮って保存し、当時の写真と照らし合わせて当時の競馬開催の様子について考えた。カメラはiPadOS18.6を用いた。奈良競馬場を知る人や、跡地を利用する施設の方との交流を通して、地域と競馬の繋がりについても考察した。

3. 馬事文化における競馬とその歴史

競馬は馬事文化の中で比較的新しい部類のものである。馬が家畜化されたのは紀元前3500年ごろの中央アジアであり、現代の馬場馬術の礎は紀元前400年ごろの古代ギリシアですでに書籍があった。一方の近代競馬は、1539年にイギリスで初めて常設競馬場が設置され始まった。そして現代に通じる基礎が確立したのは1700年台のことである。ジョッキークラブや競馬成績書、スタッドブックなどが出来たので、近代の競馬のルールが固まった(4)。

日本に競馬が持ち込まれたのは1860年のこと(5)。鎖国を解かれ、外国人居留地ができた。中でも横浜外国人居留地はイギリス人が多く、競馬を横浜市内の仮の馬場で行った。その後神戸外国人居留地でも外国人による競馬が行われた。治外法権の影響で、幕府や明治政府の法関係なく自由に賭博ができた。1864年発行の「横浜居留地覚書」にて横浜に常設競馬場を設置するという内容を含んだ決定が行われた。そして1866年に根岸競馬場が設置され、翌年から開催された(6)。そして、根岸競馬場を倣って全国各地に洋式競馬場が設置され開催されるようになった。このとき、馬券は默認されていた。そして東京競馬会の成功から公認競馬場ができ、1923年には最初の競馬法が制定された。1936年には公認競馬を行っていた主催が統合し日本競馬会ができた。戦時中も軍馬育成の目的もあって公認競馬は継続し、軍馬資源保護法により地方の競馬場でも軍馬を選定する競走が行われた(7)。

終戦後間もしばらくは新しい競馬法が制定されておらず、法に基づかない闇競馬や進駐軍が中心となって行われた進駐軍競馬などが行われた。法が制定された1946年10月に国

宮競馬は再開され、1954年に特殊法人日本中央競馬会による競馬、つまり現在の中央競馬となった（8）。

4. 奈良競馬場

奈良県の馬事文化として、奈良時代から行われていた駒競や、絵馬発祥の地の一つとされる丹生川上神社があり、競馬場もその一つである。駒競は奈良時代、絵馬は飛鳥時代に日本国内に端を発したものであるのに対し、競馬は上述のようにイギリスで1500年ごろに確立したもので、日本国内に入ってきたのは江戸時代末期である。競馬というものは比較的新しい文化なのだ。さて、奈良競馬場は1929年開場、1950年閉場の競馬場だ（写真1（9）、図1（10））。設置されていた期間は21年と短く、さらに閉場から75年経過していることから文献は多くない。しかしながら、地域とのつながりを示す資料は確かに存在し、そしてそのつながりは今日まで伝えられているのである。

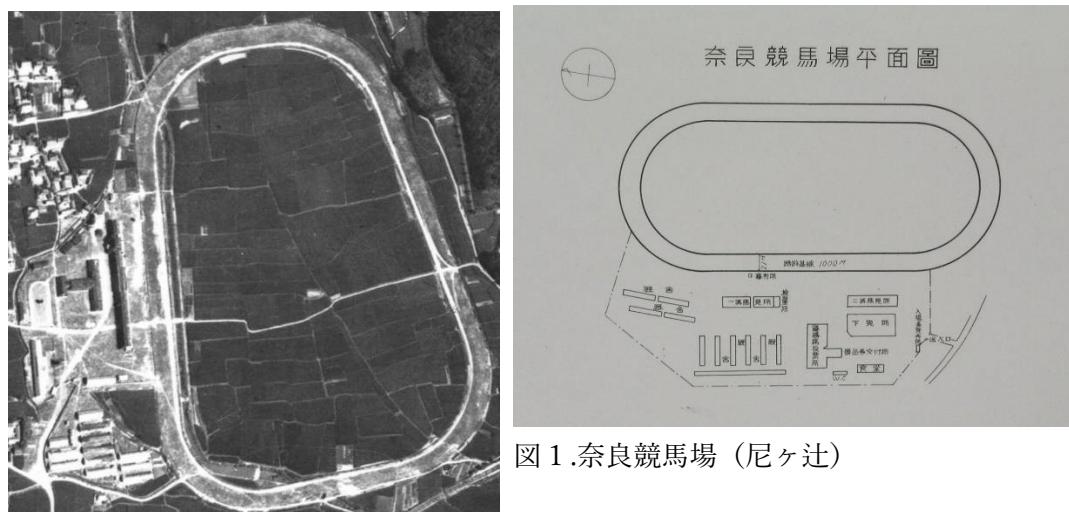


写真1.奈良競馬場（秋篠）

4.1. 奈良競馬場の歴史

奈良競馬場は1929年に、生駒郡都跡村（現：三条大路南）に開場した。（本稿では、この競馬場を尼ヶ辻競馬場、尼ヶ辻に競馬場が設置されていた期間を“尼ヶ辻時代”と呼称する。）この尼ヶ辻競馬場のコースは一周1000m、幅員21mと当時の他の競馬場と比較しても大きくなかった。しかし奈良県内初の試みであったことや、奉納競馬が著名であり、さらに県民は他県の競馬である鳴尾競馬にも熱が入るなど県内での競馬熱が高かったことから非常に人気になった。そのため地域住民だけでなく近畿地方に居住する多くの競馬ファンが詰めかけ、その総観客者数はスタンドが収容できる人数を超える35000人以上に及んだ

(11)。尼ヶ辻時代は競馬を公営とする法が制定されていなかったため、民営である奈良畜産組合主催で競馬を行っていた。第一回競馬開催日は書籍により 1 日前後のぶれがあるが、当時の奈良新聞によれば 10 月 19 日から 3 日間の開催であった(12)。この頃は午前 9 時に開始し、12 レースあった。第一回開催では全国から 180 頭余りの競走馬が参戦し、騎乗速歩と駆歩（くほ、かけあし）で競った。速歩はクラス分けがないが、駆歩には甲、乙、丙、丁、丁ニというクラス分けがあった(13)。これは愛媛県に存在した三津浜競馬場と同じ区分であり、当時の地方競馬はこの区分が一般的である可能性が高い。入場料は一円だが、財政難に苦しむ県財政局が課した競馬観覧税により 1930 年以降は 3% 上乗せされている。現代の競馬場と比較すると、勝馬投票券の値段や配当が特に異なる。現代では 100 円刻みで自由な値段で購入できる勝馬投票券だが、尼ヶ辻競馬では一枚一円、三円、五円、十円、十二円があり、配当は 10 倍まで(14)。初開催時(1929 年)の米の価格およそ 5 円／10 kg であったことを考えると、2024 年の米の価格は約 8,000 円／10 kg であり、約 1600 倍となっていることから換算すると当時の 1 円は 1600 円ほどとなり、当時最も安い 1 円馬券は現在の 100 円の馬券よりも高価だったと考えられる。また、当時発券機は存在しなかったため、勝馬投票券は手渡しで販売されていた。一方で、今日でもレース発走時にファンファーレが鳴るが、当時もスタート時に用意の合図を送るサイレンがあった。投票締め切り時にベルが鳴る点も現代と同様である(15)。

1939 年には、観客数が多く尼ヶ辻では手狭になったことにより奈良市秋篠町に造成された新競馬場に移転した(本稿では、この競馬場を秋篠競馬場、この競馬場が設置されていた時代を秋篠時代と呼称する)。秋篠競馬場は公認競馬場への志を体現しており、一周 1600m、幅員 30m と公認競馬場の規格という当時では地方競馬場の中でも大きい馬場をもつうえ、スタンドも公認競馬場である京都競馬場で 1936 年まで使用されていたものをそのまま移転させている。公認競馬場用のスタンドとあって、全長九十三間半(約 170 メートル)あり二階建てで一階には一等席、二等席、二階に貴賓指定席がありと京都競馬場時代東洋一と言われたスタンドが移設されて尼ヶ辻時代のそれよりも豪勢になっていた。第二次世界大戦開戦直後である 12 月 23 日に初開催が行われ、戦時中の軍馬育成を進める方針も作用して地方紙では次年度から始まる鍛錬馬競走と共に「お名残り競馬」と大々的に取り上げられた(16,17,18)。新聞の広告面が競馬開催の広告でいっぱいになり、広告の絵もこれまでのデザイン的なものではなく目を惹く絵画になった(19)。競馬場のほど近くに大阪電気軌道平城駅がある。1940 年からは軍馬資源保護法により馬券発売を優等馬投票とした鍛錬馬競走を実施し、勝利した馬は戦地へ送られた。この軍馬資源保護法の 1943 年の改正で主催である奈良畜産組合は奈良馬匹畜産組合へと改称された。なお、奈良競馬の歴史で障害レースが行われたのはこの鍛錬馬競走時のみである。鍛錬馬競走は戦況悪化に伴い 1944 年に中止された(3)。戦時中、競馬場倉庫は大阪軍管区師団が使用していたとする記録がある。戦後は 1946 年より再開され(まだ新競馬法が制定されていない当時は闘競

馬)、1948年7月に現在の競馬法が制定されると、地方競馬の開催は都道府県もしくは市區町村で行われるよう決められ、奈良競馬は組合の運営から奈良県営となった(8)。勝馬投票券は単勝と複勝、馬連の三種類に増加し、一枚十円(1947年消費者物価指数によれば現代の53円ほど)となり、配当は百倍までつくようになった(20)。戦後は入場料が無料だったため、競馬観覧税の規則はあるものの実際には税をかけられず「宙ぶらり」の状態だったという(21)。

1950年に競馬場厩舎付近に競馬場と併設する形で競輪場が開場した。競輪場は1948年に小倉競輪が始まったのが起源で、開場当時新しい賭博であったことからブーム真っ只中だった。また、競馬が一年に2回から4回しか開催できないのに比べ一年で12回まで、つまり1ヶ月に一回と高頻度で開催できることから競馬に取って代わるように大きな売上を記録した(30)。そして競輪に客を奪われるような形で1950年、奈良競馬は開催を終了。尼ヶ辻時代10年、秋篠時代12年の奈良競馬は幕を閉じた。

奈良競馬場の変遷の簡易年表を表1に示した。

表1. 奈良競馬場年表

| 年 | 奈良競馬場関連事項 | 世の中の出来事 |
|------|-------------------------------------|--------------------------|
| 1929 | 奈良競馬場（尼ヶ辻競馬場）設置・開場。10月に初開催 | |
| 1939 | 秋篠競馬場に移転。12月に初開催 | 第二次世界大戦 開戦 |
| 1940 | 軍馬資源保護法により鍛錬馬競走の実施。奈良競馬場史唯一の障害レース開催 | 日独伊三国軍事同盟条約調印 大政翼賛会発足 |
| 1943 | 主催の奈良畜産組合が奈良馬匹畜産組合に改称 | ドイツ軍がスターリングラード攻防戦に大敗 |
| 1944 | 鍛錬馬競走中止。倉庫を軍が使用 | ノルマンディー上陸作戦 レイテ戦 |
| 1945 | | 第二次世界大戦 終戦 |
| 1946 | 新競馬法を待たず9月に競馬開催。 いわゆる闇競馬 | 日本国憲法公布 |
| 1948 | 新競馬法制定。主催者が奈良馬匹畜産組合から奈良県へ | 第一次中東戦争勃発 |
| 1950 | 奈良競輪場開場。奈良競馬場は第三回競馬を持って開催を終了。 | 朝鮮戦争勃発 |

4.2. 奈良競馬場と地域

この項では、奈良競馬と共に歩んだ地域の様子について述べる。また、関西の他の競馬と奈良競馬の関わりについても記述する。

この探究をするにあたって大きなきっかけ、そして手がかりとなったものは、入江泰吉氏が撮影した5枚の写真だった。入江泰吉は奈良県を撮る写真家で、その作品は叙情的であることで知られる。入江氏は1947年秋の開催に秋篠競馬場を訪れ、5枚の写真を撮影している(写真2から6)。これら写真の撮影場所を、写真の両端に映った地点を結ぶようにして特定すると図2のようになり、5枚のうち3枚はスタンドのほとんど同じ地点から撮影され(写真4から6)、写真2,3はスタンドから降りてそれぞれ別の地点から撮影されていると推測できる。写真4には木製と思われる屋根が映り込んでおり、入江氏はスタンド2階貴賓席から写真を少なくとも一枚撮影していることがわかるので、指定席に招かれるだけの人物であったことがわかる。入江氏は競馬場だけでなく周辺にある秋篠寺、後年には競馬場廃止後の奈良競輪場を訪れ写真を残していることから、奈良県の他地域と同じようにこの地域の移り変わりにも何か感じていたと考えられる。そして、その中の一つの時代に競馬場があったことを記録しようと考えたのだろう。これら写真は歴史資料としての価値も高いと筆者は考える。なぜなら、秋篠競馬場を写した写真は後述の大和タイムズ社長賞のカップ授与の報道に用いられた写真とこの5枚のみだからである。その上この5枚の中に競馬場を運営する上で主要な施設はほとんど写っており、その用いられ方、当時の人の様子も記録されている()。これを用いて後に4.3.の調査ができるようになった。



81. 奈良競馬場 昭和22(1947)年10月



82. 奈良競馬場 昭和22(1947)年10月

写真 2.馬券発売所からパドック※2

写真 3.競馬場スタンド※3



83. 奈良競馬場 昭和22(1947)年10月

写真4.出走前の人馬※4



84. 奈良競馬場 昭和22(1947)年10月

写真5.レース※5



85. 奈良競馬場 昭和22(1947)年10月

写真6.ゴールの瞬間の審判所※6

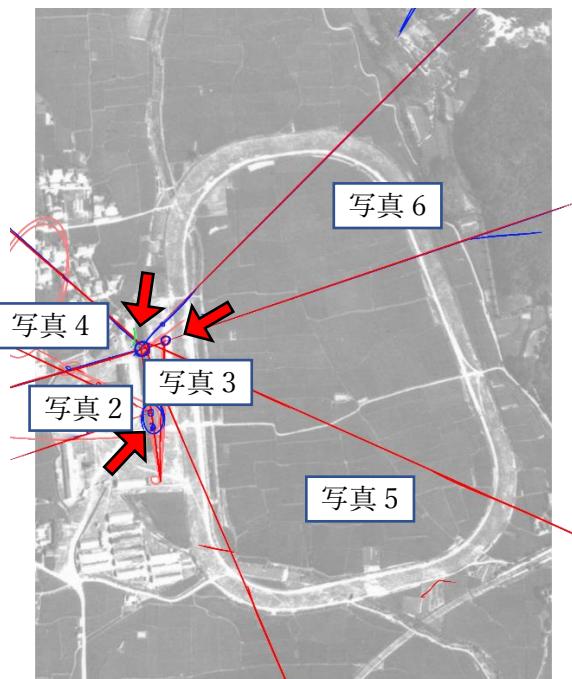


図2. 撮影地点

奈良競馬を主催、運営している奈良畜産組合は畜産組合法によって定められた、牛羊豚の飼養や馬の生産を業とする者の組合である。奈良県は競馬場があった当時競走馬の生産を行っていなかったものの、明治から昭和にかけて他の地域より先進的な稲作技術「奈良

段階」があり、その多くの工程で牛が農家の補助をしていたために多くの牛を飼養していくことで組合ができたと考えられる(31)。つまり組合員は周辺地域の農家であり、競馬による利益は組合に入ったため奈良新聞(1929年)には「お蔭で附近農村はホクト」という記事が掲載されたこともある(32)。また同じ頃、1929年の奈良新聞に、尼ヶ辻點景という記事がある(21)。點景というのは現代の言葉遣いでは「点景」であり、これは『風景画などで、趣を出すために加えられる人や物。風景画に書き添えられた人物など。また、それらを加えること。』(日本国語大辞典)だそうだ。この記事の著者は、当時の競馬開催に趣を添えようと考えて筆を取ったのだと推測できる。この記事は競馬場設置2年目の秋開催で、一度だけ掲載されたもので、他のイベントで同じように「點景」が掲載されたり、競馬開催ごとに更新されたりするものではなかった。このことから、この記事はこの頃特に競馬が盛り上がっていたことを示していると考えられる。その内容は秋の花嫁、本目、穴、廉い圓感、雑感で構成されており、当時の勝馬投票券の買い方や購入する客の様子、出走前のサイレンなど現代では見られないものを克明に記しており、現代との比較においても貴重な資料になった。この記事によれば、現代の「本命」にあたる言葉は「本目(ホンメ)」であり、払い戻しはプレミアムと呼ばれている。一方穴馬についてはこの当時も穴と呼ばれており、用法も変わらない。そして、現代の競馬場はいわゆる庶民にも親しみやすい場所であり、近年では中央競馬、地方競馬共に設備も刷新されファミリー層でも楽しめるようになっていているが、当時の競馬場には一攫千金を目論む庶民もいた一方で芸妓や令嬢が多く、投票に忙しく駆けていたという。この点は、日本よりフォーマルな場として用いられ、ドレスコードがある場合も少なくない欧州の競馬場に類似しているといえよう(21)。

競馬の流行を示す記事は他にもある。例えば、「競馬の話」というコラムがあった。これは、1929年の奈良競馬初開催時に奈良新聞に掲載されたもので、全部で五回以上ある。しかし内容は奈良競馬にちなんだものではなく帝国馬匹協会の公認競馬場についてで、騎手の手腕やそれぞれのコースの特徴をまとめたようなコラムである。大抵3面の左下に大きく枠が取られており、それは奈良競馬の結果よりも大きいくらいだった(22,23)。しかしながらこれが掲載された新聞が5号以上続いているのだから、少なくとも新聞社内では大きな反感はなく、好感度だったと考えていいだろう。奈良競馬に関わりの少ないものも含め競馬の内容が多く登場し、多くの人に見られていたことからも県全体で競馬という競技、賭け事が流行していたことを感じられる。これに関連することとして、第二次世界大戦の大和タイムスも競馬と関わりが深かった。大和タイムスとは1946年創刊の地方新聞で、現在の奈良新聞である(戦前の奈良新聞とは異なる)(24)。大和タイムスは他の地方紙(奈良日日新聞など)や全国紙の地方面と比較してもより多く奈良競馬場について取り上げており、後の公営ギャンブルに寛容だったといえる。1950年奈良競馬場が赤字の危機に陥ると、奈良県の要請でパンフレット「競馬の知識」を新聞に折り込み県内の競

馬ファン増加に協力した。そのうえ社長杯を行い勝利した騎手には大和タイムス社長賞としてカップを授与し大きく報道する(写真7(25)、図3(26))など奈良競馬を最後期まで伝え続けた。他の新聞が開催前の広告を掲載する程度なのに対し、大和タイムスは県営競馬の予想まで行い、結果も掲載されている。



写真7.社長から騎手へのカップ授与

図3社杯の日の記事

上記は競馬を楽しみ、熱中する多岐にわたる人々がいたことを示す、いわば競馬場の「光」の部分を伝えた資料だ。しかし、競馬にはその賭け事という性質上「闇」の側面が少なくない。専ら尼ヶ辻時代の奈良競馬では関西圏から多くの人が集まつたことや、県初

めての試みである競馬運営に慣れていなかったことから多くの犯罪がセンセーショナルに報じられた。中でも窃盗がほとんどを占め、入場券や勝馬投票券を購入するために一円札を出したところをスリに取られたという事例が複数報告されている。また、喧嘩や自彌院からの脱走などのトラブルが記事にされている。このような犯罪、非行行為のうち、窃盗については奈良県内でなく近隣の府県からの客のものだった(27,28,29)。というのも、当時の奈良県の競馬ファンが鳴尾競馬に足繁く通い、春木競馬の開催を心待ちにしたのと同じように、奈良競馬も奈良県内だけでなく近畿の競馬ファンに愛されていたのである。これは秋篠競馬場に移ってからの記録だが、大和タイムス(1950)によれば、奈良競馬に訪れた客の85%は大阪府から、京都府が10%、そして地元である奈良県は5%であった。1939年秋篠競馬場が新装になった時にも京阪神の競馬ファンが訪れたことが特に書かれていた。中でも大阪府の競馬ファンが多かったのは大阪府の人口の多さと、当時府内に2場の競馬場があり、しかも収入は2場合わせると57万の奈良の四倍近い102万(1929年)と圧倒しているように競馬熱もよりあったためだと考えられる。尼ヶ辻から秋篠にかけて奈良競馬を運営した奈良畜産組合、奈良県はいずれも、大阪の客を逃さないよう大阪の競馬場とは開催日程が被らないよう調整をしていたという。

他地域との関わりとして他に挙げられるのが、出走馬についてである。当時は馬主が調教師や厩務員、場合によっては騎手の仕事も担当していたため、馬主のいる地域がその馬が所属している地域とされていた(8)。そのため馬の地元ははっきりしているが、このころの競走馬はどこかにずっと留まることは少なく全国に赴いてレースに出走していたので奈良競馬にもさまざまな地域の馬が出走している。1950年2月の開催では厳しい経済状況の中で200頭以上の出走馬が参戦した。その内訳は地元奈良県が50頭、滋賀県が50頭、大阪府が35頭、京都府が15頭、和歌山県が15頭、北陸が25頭、その他だった(図4)(26)。これらは多くの馬を集め、かつその時代馬の質がいい競馬場(賞金が高くていい馬が集まりやすい競馬場)である大阪、京都の競馬場からも出走させることで不振から脱却しようという試みだと考えられる。実際この開催や次の開催では10万円から20万円ほどの黒字とはなっているが、飽和する競馬場や、競輪の流行には勝てず、この年秋をもって競馬開催は終了したとされている。



図4.全国から集まる馬たち

しかし、それまでの20年以上で奈良競馬の騎手が得た信頼は、決して少なくなかったことを知らせる資料がある。それが、奈良競輪場工事中止裁判である。奈良競輪場は1950年2月に奈良県によって着工されたが、それから程なくして「工事により耕作地がつぶされる」ことを理由に県を相手どった訴訟を起こされている。そしてこのとき訴訟を起こしたのが元騎手の芳林倉蔵氏だった。この土地は奈良産業株式会社の土地で、戦後以来奈良馬匹畜産組合に貸していたそうだが芳林氏のものではない。しかし、芳林氏が訴訟を起こし、奈良簡易裁判所の判決でそれは認められた。一時工事中止の判決が下ったのである。奈良県は組合に貸したもので芳林氏に貸した土地でないこと、競馬主催者が組合から奈良県になった時点での土地は奈良県のものだと考えていることなどから芳林氏側が不法占拠であるとの解釈をしていたが、その意見は退けられた。県が地裁に控訴し、補償によって工事中止の仮処分を取り消す判決が下ったため競輪場は完成に漕ぎ着けたが、一元騎手である芳林氏が組合や会社に代わり訴訟を起こすことができ、そしてその訴えが簡裁、地裁によって認められたことは、彼、ひいては彼ら騎手だった者たちの信頼を裏付けるものになるのではないだろうか(30,31)。

4.3. 後世に残る奈良競馬

奈良競馬場は1950年に廃止されたが、奈良競輪場は現在も開催を続けている。筆者は、奈良競輪場に複数回足を運び、競輪場関係者の方への聞き込みなども交えつつ奈良競馬場時代の跡を調査した。

まず、筆者が発見できた跡について。一つ目に挙げられるのが花壇である。写真 8 から写真 11(32,33,34)に競馬場時代から現在までの花壇(赤丸部)の変遷を示した。競馬場時代の建物の位置を考慮すると写真 3 に写っていた花壇がこの花壇であり、競馬場時代から使われ続け、現存している。写真 12 は 2025 年 3 月に撮影した花壇の様子だが、コンクリート製ブロックの囲いの下に見えるものは岩であり、写真 3 と同じように岩が並べられている。幾つかは写真 3 の岩と似ていると感じ、形を合わせるように試みたが、写真 3 を拡大したところあまりに画質が荒くなってしまい断念した。二つ目に当時の馬頭観音が挙げられる。現在競輪場内にある奈良県競走労働組合敷地内に存在するもので、「馬頭観世音菩薩」と表記された岩が祀られている。現在は Keirin.jp 内井上和巳氏のコラム(2017 年)で確認できる(35)。現地では関係者以外立ち入り禁止の場所のため撮影できない。三つ目は競馬場時代の御神木である。これは奈良競輪開催時に警備員の方に奈良競馬の跡を探していることを申し出て教えていただいたものである。馬頭観音と同様奈良県競走労働組合敷地内にあり、現在の空中写真から推測すると配置としてはこの御神木の根元に馬頭観音があるような形になる。競馬場ができた頃に植えられたものと考えられ、その場合樹齢は 85 年以上であるこの御神木は競輪場の高さよりも高くまで育ち、1950 年ごろに植えられたと考えられる競輪場神社の御神木と共に競輪場外からでも目立つシンボルになっている。そしてコース跡はほとんど完璧と言っていいほどに残っており、その内周と外周は車道のため車で走行できる。このコース跡の一部は家屋、その他は田になっている。この家屋は、奈良県吉野町の津風呂部落に津風呂ダムを作った際に失われた集落の家庭のうち、約 20 戸が 1958 年に移り住んできた家だ(36)。



写真 8.1948 年の空中写真



写真 9.1975 年の空中写真



写真 10.2021 年の空中写真



写真 11.現在の花壇

次に、筆者は発見できなかったが競輪場関係者の方に伝えられてきたものを紹介する。競輪場内飲食店の方にお尋ねしたところ、競馬場コースの跡地の田もしくはコースの内側(現在の競馬場では内馬場になっている部分)の田に、当時発走前の競走馬を留めるためにあった馬留めの跡があるとのことだった。その方によれば「田の中にポツンとある岩のようなもの。コース沿いだと思う。昔にあるのを見たけれど、もうない可能性もある。」だそうだ。この証言を元にコース沿いを中心に歩いて岩のようなものを探したが、発見することができなかった。無くなってしまった可能性がある。しかし、コース沿いではないものの、細石のような構造の約 2m の柱を発見することができた。上下に金具のようなものがついていたことから競馬場に関連するものの可能性もある。農家の方とコミュニケーションをとって、この柱についてより知りていきたい。

最後に、現存しないものの競馬廃止後 1970 年台後半まで残り続けたものを紹介する。それは、審判所である。審判所とは写真 5 に写っている建物のことで、ゴールの瞬間を目視で見て着順を決定し、掲示する施設である。この審判所は現存しないが、1979 年ごろまで存在が確認されている。1970 年代には、審判所の周囲は競輪場の駐車場になっており普通ならば撤去しているはずであるため、現存する跡とは異なり何か活用されていたと考えられる。

尼ヶ辻競馬場は現在新たに建物が建ち形跡は見られないが、地中にその痕跡が残っていることがわかっている。

まず地質について。尼ヶ辻競馬場跡は平城宮跡に含まれるため頻繁に調査が行われている。中でもボーリング調査により地質を見たところ、競馬場のあった期間の土のみ、黒色の砂を主体に耕土が含まれている地質で、馬場に適していたことが明らかになっている(奈文研紀要、2018年)。そして、林(2009年)によれば競馬場跡地北側の内馬場だった部分にて尼ヶ辻競馬場に関連する、護岸杭列を伴う池が確認されている(37,38)。

5. おわりに-今後の展望-

本稿では奈良競馬場について探究し、その記録と競馬と地域の関わり、そして今まで残る跡を文献とフィールドワークによって調査した。開催はたった20年余りと短期間だった上、廃止から75年経過し、その蹄跡を辿るのは簡単ではなかった。しかし、新聞には馬たち、人々、そして競馬という興行の様子がありありと記されていた。また、秋篠競馬場の跡地でありながら一見競馬場時代の影も形もないように見える奈良競輪場には、未だその地に留まり続ける跡が確かにあった。競輪場に携わる人々にも、その地が競馬場であったという意識があり、そしてまだ書籍やインターネットでは知られていない多くのことが刻まれていた。これらをまとめ、保存できる形にするということがサブタイトルの通り筆者の目的の一つである。これは、現時点での自身のできる限界まで遂行できたと考える。

さて、奈良競輪場は2024年開催の競輪事業の存続を議論する奈良県営競輪あり方検討委員会で事業存続が提言され、今後も続いていくだろうと考えられる。しかし、この提言を踏まえ、奈良競輪場は2030年の国民スポーツ大会を見据え競輪場全体の敷地内の老朽化した建物を建て替え、集約する大規模な改修を行うそうだ(奈良県、2025年)(39)。事業費は95億円にも及ぶ。競輪場が存続しなければ今ある競馬場の跡が受け継がれることはほとんどないと考えていたので、存続は嬉しいことだが、改修が迫る中で筆者の懸念は改修後どれだけ跡が残り続けてくれるかにある。花壇も、馬頭観音も、御神木も、全て貴重な75年前のことを伝えてくれる存在だ。様々な写真と組み合わせることで、昭和初期から戦後の奈良県の娯楽を支えた、そして第二次世界大戦に深く関わった奈良競馬場の存在が蘇ってくるような歴史的価値の高い資料でもある。これらの跡が守られなければ、奈良競馬を伝える「もの」は無くなってしまう。それは競馬史に留まらず、奈良県の歴史を学ぶ上でも損失になりかねない。そのため筆者は、これらの跡が未来に残るよう、守っていきたいと考えている。もちろん競輪場の改修は必要だと考えるが、これらの跡を残していくため、できるだけ詳しくこの跡のことを記録し、伝え、資料としてできればそのままの形で残せるようにしたい。もし改修で無くなってしまうなら、その前に3Dなど立体的に見て、比較できるようにすることでこの跡たちが完全に消えてしまわないようにしたいと思う。

6. 謝辞

本探究の遂行にあたり多くの方々のご助力を賜りました。

フィールドワークの中で、開催中や場外発売営業中にお伺いしたのにも関わらず快く様々なことをお聞かせくださいました競輪場関係者の皆さまに深く感謝いたします。

また、文献の調査やフィールドワークなど多くの場面で支えて下さった家族に深謝いたします。

Works Cited (引用、参考文献)

- (1) 浅野靖典 (2006) .『廃競馬場巡礼』.東邦出版.
- (2) 地方競馬全国協会 (1975) 『地方競馬史第3巻』.出版社不明,[地方競馬史]
- (3) 地方競馬全国協会 (1974) 『地方競馬史第1巻』.出版社不明,[地方競馬史]
- (4) 秋山響 (2025.8) .「イギリス競馬の概要」.JRA.
<https://www.jra.go.jp/keiba/overseas/country/gbr/index.html>, (2025-10-15)
- (5) ほどよい競馬 (2022-7-13) 「日本競馬の歴史をわかりやすくまとめてみる」.ほどよい競馬. <https://mag-p.com/39/>, (2025-10-15)
- (6) 森彩子 (2024) 「横浜外国人居留地-居留地覚書と外国人墓地-」『研究会誌』pp1-7
- (7) (1939) 『軍馬資源保護法』.日本法令索引.
<https://hourei.ndl.go.jp/simple/detail?lawId=0000028632¤t=-1>, (2025-10-15)
- (8) (1948) 『競馬法』.JRA. chrome-extension://efaidnbmnnibpcajpcglclefindmkaj/<https://jra.jp/company/about/law/pdf/01.pdf>, (2025-10-15)
- (9) 国土地理院空中写真 (USA,M85-1,145,1948年撮影) を拡大
- (10) 田内昂作 (2025) .「奈良競馬場」.競馬切手:HORSE RACING STAMP.
<https://keibastamp.d.dooo.jp/newpage108.html>, (2025-9-22)
- (11) 白熱した競馬 入場者三萬五千.奈良新聞.1929-10-21,朝刊.
- (12) 奈良大競馬大会.奈良競馬.1929-10-19,朝刊.
- (13) 落慶式 奈良競馬.奈良新聞.1930-5-2,朝刊.
- (14) 愛媛県生涯学習センター (2009) .「2 三津浜にあった競馬場」.データベース『えひめの記憶』.<https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:1/27/view/3780>, (2025-10-10)
- (15) 尼ヶ辻點景 競馬場から.奈良新聞.1930-10-26,朝刊.
- (16) 奈良競馬 新馬場上に人気沸騰.快晴に恵まれてファン殺到凄し.1939-12-24,朝刊.

- (17)秋篠の新競馬場 明日からお名残り競馬.毎日新聞(奈良版).1939-12-22,朝刊.
- (18)奈良競馬あすから 出走馬も新記録的多數に上り 愈々新馬場蓋開け.1939-12-22,朝刊.
- (19)奈良競馬.1939-12-20,朝刊.
- (20)勝馬投票券は単勝と複勝、馬連の三種類に増加し、一枚十円(1947年消費者物価指数によれば現代の53円ほど)となり、配当は百倍までつくようになった
- (21)馬券税宙ぶらり 通達未着の奈良競馬.毎日新聞(奈良版).1946-10-5,朝刊.
- (22)競馬の話 馬と騎手 勝馬の研究【二】 騎手の手腕と馬の力.奈良新聞.10-17,朝刊.
- (23)競馬の話 馬と騎手 勝馬の研究【五】 タイムは一の目標.奈良新聞.10-20,朝刊
- (24)A 奈良新聞(掲載年不明) .「沿革」.奈良新聞デジタル. <https://www.nara-np.co.jp/company/history.html>, (2025-10-10) .
- (25)本社社長杯はマツヒカリに.大和タイムス.1950-2-12,朝刊.
- (26)いよいよきょう県営競馬開く.呼び物は特別馳歩.大和タイムス.1950-02-11,朝刊.
- (27)スッた金 競馬でスル.奈良日日新聞.1946-10-7,朝刊.
- (28)掏摸の三人組 競馬場をウロついて捕る.奈良新聞 10-24,朝刊.
- (29)競馬場でスリの失敗 一圓札一枚で.奈良新聞.1930-10-26,朝刊.
- (30)きょう競輪場開き 走路は40度傾斜の國際規格.大和タイムス.1950-5-19,朝刊.
- (31)競輪場の工事中止 奈良簡裁の判決に縣側狼狽.大和タイムス.1950-3-15,朝刊.
- (32)国土地理院空中写真(USA-M85-1-145,1948年撮影)を加工
- (33)国土地理院空中写真(CKK747-C28-21,1975年撮影)を加工
- (34)国土地理院空中写真(CKK20211-C11-30,2021年撮影)を加工
- (35)井上和巳(更新日不明) .「バンクのつぶやき 続編
⑥」.KEIRIN.JP.<https://keirin.jp/pc/dfw/portal/guest/column/tokusyu/2017/20171006.html>, (2025-10-10)
- (36)公益社団法人全国開拓振興協会(更新日不明) .「古の地名を開拓で残す」. 公益社団法人全国開拓振興協会. chrome-extension://efaidnbmnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.kaitakusya.or.jp/data_files/view/707/ mode:inline, (2025-10-16)
- (37)小池伸彦(2018) .「平城第552次調査検出の地震痕跡について」『奈文研紀要』, pp60-61
- (38)林正憲(2009) 「平城京右京三条一坊八坪の調査(平城第448次)」『奈文研ニュース』, 33, p3
- (39)奈良県(2025) .「国民スポーツ大会を見据えた競輪場の再整備及び収益を活用した基金の創設等について」. chrome-extension://efaidnbmnnibpcajpcglclefindmkaj/<https://www.pref.nara.jp/secure/319313/R70213teirei1sports.pdf>, (2025-10-16)

・画像引用

※1 写真 1

国土地理院空中写真 (USA,M85-1,145 ,1948 年撮影) を拡大

※2 写真 2

財団法人ならまち振興財団、入江泰吉記念奈良市写真美術館(2005).『入江泰吉 古都の暮らし・人－昭和 20 年代から昭和 30 年代－』.明新社,81.

※3 写真 3

財団法人ならまち振興財団、入江泰吉記念奈良市写真美術館(2005).『入江泰吉 古都の暮らし・人－昭和 20 年代から昭和 30 年代－』.明新社,82.

※4 写真 4

財団法人ならまち振興財団、入江泰吉記念奈良市写真美術館(2005).『入江泰吉 古都の暮らし・人－昭和 20 年代から昭和 30 年代－』.明新社,83.

※5 写真 5

財団法人ならまち振興財団、入江泰吉記念奈良市写真美術館(2005).『入江泰吉 古都の暮らし・人－昭和 20 年代から昭和 30 年代－』.明新社,84.

※6 写真 6

財団法人ならまち振興財団、入江泰吉記念奈良市写真美術館(2005).『入江泰吉 古都の暮らし・人－昭和 20 年代から昭和 30 年代－』.明新社,85.

写真 7

本社々長盃授与一県営競馬一.大和タイムス.1950-02-13,朝刊.

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社、光村推古書院書籍編集部(2011).『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路 昭和 20 年代～30 年代』.光村推古書院,p111.

※13 写真 13

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社、光村推古書院書籍編集部(2011).『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路 昭和 20 年代～30 年代』.光村推古書院,p118.

・図引用

図 1

田内昂作 (2025) .「奈良競馬場」.競馬切手:HORSE RACING STAMP.

<https://keibastamp.d.dooo.jp/newpage108.html>, (2025-9-22)

図 2

国土地理院空中写真 (USA,M85-1,145 ,1948 年撮影) を加工

図 3

いよいよきょう県営競馬開く.呼び物は特別馳歩.大和タイムス.1950-02-11,朝刊.

・文献

本社々長杯授与 －縣營競馬－.大和タイムス.1950-2-13,朝刊.

奈良競馬 新馬場上に人気沸騰.快晴に恵まれてファン殺到凄し.1939-12-24,朝刊.

秋篠の新競馬場 明日からお名残り競馬.毎日新聞(奈良版).1939-12-22,朝刊.

奈良競馬あすから 出走馬も新記録的多數に上り 愈々新馬場蓋開け.1939-12-22,朝刊.

愈々お名残り競馬 三百餘頭出場の最高レコード 廿三日より奈良競馬.奈良新聞.1939-12-3,朝刊.

奈良競馬.1946-10-1,朝刊.

白熱した競馬 入場者三萬五千.奈良新聞.1929-10-21,朝刊.

尼ヶ辻點景 競馬場から.奈良新聞.1930-10-26,朝刊.

奈良大競馬場ゆき 奈良市街乗合自動車.奈良新聞.1930-5-1,朝刊.

さすがに競馬 三日間の賣揚げ 三十萬九千七百餘圓.奈良新聞 10-23,朝刊.

第2回奈良競輪場.大和タイムス.1950-4-7,朝刊.

奈良競馬 今日第二日.奈良新聞.1930-10-26,朝刊.

落慶式 奈良競馬.奈良新聞.1930-5-2,朝刊.

今日幕明く 競馬番組決定 勝は何れが占める？ そして穴馬の僕倖は.奈良新聞.1930-5-2,朝刊.

競馬ナンセンス 踏倒し男を探す人 弟妹を忘れて狂奔.奈良新聞.1930-10-29,朝刊.

馬券税宙ぶらり 通達未着の奈良競馬.毎日新聞(奈良版).1946-10-5,朝刊.

奈良競馬.1939-12-20,朝刊.

競馬顧覧税 實に一萬八千餘圓 都跡村は七千五百圓.奈良新聞.1930-5-26,朝刊.

.

第三回縣營競馬 賣上げ八百万円の予算.大和タイムス.1950-11-8,朝刊.